

巻 頭 言



朝読と 『会津坂下町の傳説と史話』、 それからもう一冊

学校長 松 尾 幸 生

本校の朝の読書は、とても良い取り組みであると思います。本校生がどんな様子で朝読に取り組んでいるのか見てみたいと思い、各クラスへ数回ずつ足を運んでみました。いずれのクラスもしっかりと取り組んでおり、大変感心しました。2巡目以降は、生徒の皆さんの様子を気にするまでもなく、私自身も読書に集中しました。

私が朝読に持参しているのは、『会津坂下町の伝説と史話』という本です。4月に着任した私は、本校図書館はどんな具合かなと書架にある本を一通り見てみました。その中で目にとまった一冊です。著者は、巻頭の挨拶で「歴史は祖先の足跡であり、伝説は歴史の童話化したものである。そして民話は、その民族の夢であり憧れである。」と述べています。会津坂下町については、馬刺しが美味で、高田馬場での果たし合いそして忠臣蔵の堀部安兵衛ゆかりの地ほどの知識しかなく、どんな歴史がこの町にはあるのかを知りたいと思っていた私には打って付けの本でした。構成は、町内の地区ごとに整理されており、その点も私には非常に有り難いところでした。掲載されている話は300近くあり、内容を紹介するのは難しいので、各地区一つずつ話の題を紹介します。

坂下「坂下生まれの堀部安兵衛」

金上「芋の葉先生」

広瀬「広瀬神社と池月」

川西「高寺山に黄金千杯」

高寺「束松峠と北条時頼」

八幡「心清水八幡の由来」

若宮「夢で伊勢参りした話」



さて、“もう一冊”は、米国で最も権威のある文学賞の1つ「ナショナル ブック アワード」の2018翻訳文学部門に選ばれた、多和田葉子氏の『献灯使(けんとうし)』です。

2017年8月、多和田葉子氏(ベルリン在住、芥川賞作家)、和合亮一氏(詩人)、開沼博氏(社会学者)の三氏による『ベルリン、福島～あの日から言葉の灯りをさがして～』と題したシンポジウムがあり、その機会に私は『献灯使』を読みました。大災厄に見舞われた後、外来語も自動車もインターネットも無くなった鎖国状態の近未来の日本が舞台で、老人は健康で死なず、子供は病弱で長生きできないというディストピア小説です。重たいけれども、多彩な言葉遊びに救われるところが多々ある、読み応え十分な作品です。

本との出会いは、予期せぬ収穫や感動に恵まれることが多いように思います。本と芸術とスポーツが身近な生活は、とっても豊かだと思います。